

六組 六場面

作者は、今までの明るい父のままだと、小さすぎる墓を何とも思っていないようなことになってしまふから、父親に崖っぷちでたばこを吸わせ、小さすぎる墓への罪悪感や責任を演出している。

高井君

作者は、自分が力がないばかりに妻に苦勞をかけさせ、子どもたちや祖母にも迷惑をかけてしまつていふという崖っぷちな気持ちを隠そうと、たばこでごまかす父親の寂しい心情を表したかった。

竹中君

作者は、この場面で母親に対する気持ちを詳しく書くために、わざと崖っぷちに行かせて、申し訳ないようにたばこをふかさせた。

飯田君

作者は、丸い石をのせただけの墓だから祖父と母に申し訳なく思つていることと祖父と母への悲しみを強調するために、父親に崖っぷちでたばこを吸わせた。

速水響君

作者は、丸い石をのせただけの墓なので祖父と母親に申し訳ないという気持ちと、祖父と母が一度も食べたことのないえびフライのおいしさを伝えるために、父親に崖っぷちでたばこを吸わせた。

中野君

作者は、墓参りの独特の空気を読者に伝えるため、母を幸せにできなかつた父親に、その責任を少しでも遠ざけるようにたばこで気を散らしているような態度にさせ、また、父親の立場と重ねさせ、崖っぷちに立たせた。

木許さん

作者は、家族みんなで墓参りをしているときに、父親を最後に少しだけ登場させて、崖っぷちでたばこを吸わせることによつて、亡くなつた母親や祖父に対して父親が申し訳なく思つていることを伝えられた。

炭竈君

作者が、いてもいなくても同じような父親を崖っぷちにまで追い込んでたばこを吸わせたのは、今まで初めてえびフライを食べたりして、明るい雰囲気だったけど、そのままじゃなくて、少し暗くして、父親が一人でやつていふ孤独さを強調するために、最後に少し離れたんだと思ひました。母親は、裕福さを経験せずになくなつてしまつたから、そういう責任や、父の罪悪感を強く表している。

作者は、主人公たちが墓参りをしているのに一人だけ離れたところから父親をおいた。それは、父親が母親がいふ寂しさを感じているから、わざと崖っぷちで、気を紛らわすためとしてたばこを吸わせた。

青谷さん